

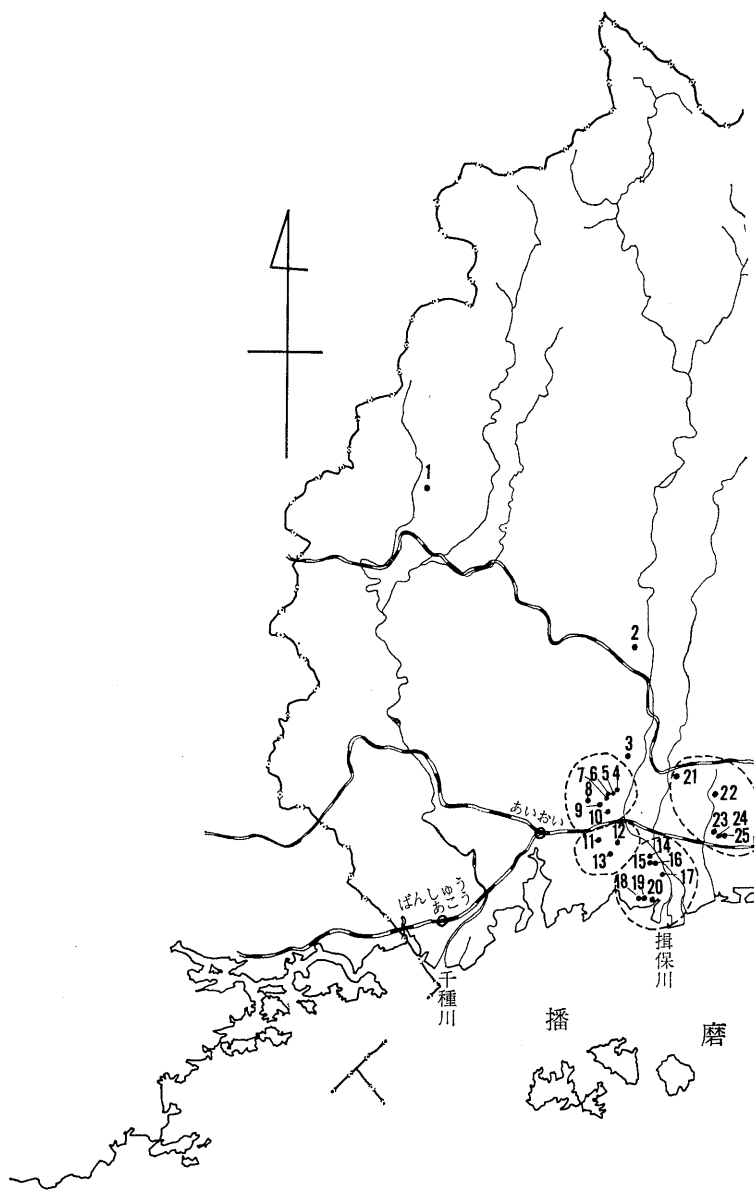
# 播磨の前方後円墳(その1)

是 川 長

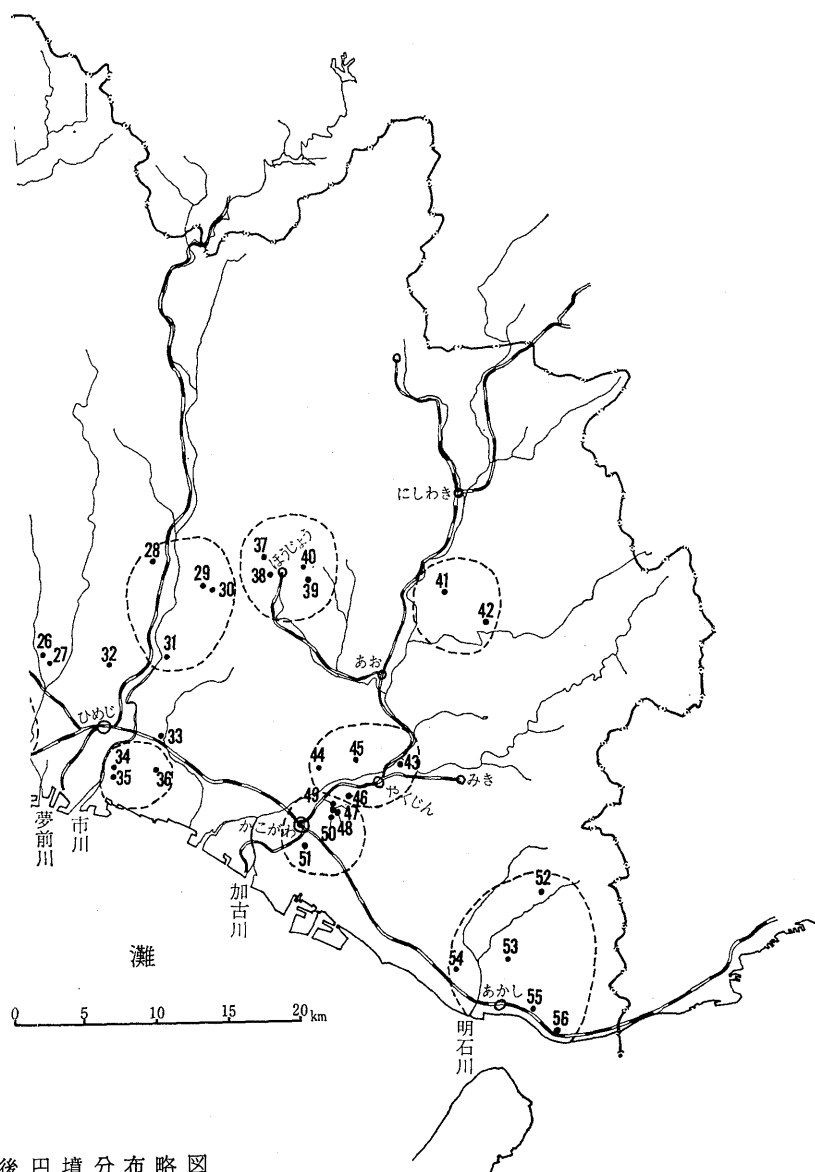
## はじめに

播磨は畿内の西隣にあり、ことに弥生時代以来、畿内文化の影響を受けたところであり、また大和政権の成立・発展の過程においても中央と地方という関係のなかで、播磨内部での発展過程が時代、時期によってさまざまな変容をしている。先に「考古学上からみた三木地方(加古川流域)の古代」<sup>1)</sup>と題して加古川流域史をまとめたことがある。その中で大和政権の地方進展の過程で、播磨が畿内と吉備地方との地理的な中間点にあること、播磨の古墳文化などをとおして、大和政権の吉備政権支配の軍事的拠点の性格があったと想定した。これについて門脇禎二氏から貴重な教示をえた。すなわち、播磨を中央史の展開の中でみることはむろん大切なことであるが、同時に「播磨」に足をつけた播磨自身の内的発展をみる——地域史の展開から古代史像の全体を検証する——研究視角が必要であることを指摘された。氏のこうした地方史研究のみなおしは近著『出雲の古代史』<sup>2)</sup>によって示されているところである。

そうした指摘を参考にしながら、小地域史であるか、「揖保川水系の前半期古墳について」<sup>3)</sup>をまとめてみたが、今回、播磨全域の前方後円墳をみてみたい。ところで播磨における古墳の発掘調査資料が増加し公表されてきたとはいえ、知見できる資料は古墳の総数からみて多くはなく、考察に制約がある。播磨地方の前方後円墳についての研究成果はいくつかある。それらを参考にしながら古墳の分布、立地等について検討を試みたい。むろん古墳発生の意義および前方後円墳の成立という問題を避けて前方後円墳の分布等を考えるわけにはいかないが、この問題と副葬品をとおしてみる播磨における前方後円墳の考察は次の機会に予定している。



第1図 播磨地方前方



後円墳分布略図

## 1. 分 布

播磨地方には中国山地から瀬戸内海にそそぐ大小さまざまな河川があって、そのうち大きなものに西から、千種川、揖保川、夢前川、市川、加古川、明石川がある。現在までに知られている播磨の前方後円墳は総計56基であり、その分布状況は第1図に示すとおりである。そのうち揖保川水系に24基あって最も多く分布している。その反面、千種川水系では佐用町の横坂古墳の1基のみである。分布の傾向は揖保川、加古川水系が卓越していて、播磨における古墳文化の顕著さを如実に示している。すなわち「播磨」を西播と東播に分けた場合、揖保川水系と加古川水系とが両者の地域の古墳文化を代表しているようにみ

第1表 播磨地方の前方後円(方)墳

水 系	基 数
千 種 川 水 系	1
揖 保 川 水 系	24
夢 前 川 水 系	2
市 川 水 系	9
加 古 川 水 系	15
明 石 川 水 系	5
計	56

れる。東播の加古川水系では日岡古墳群、西条古墳群のように前Ⅲ期を中心とする典型的な古墳群があるのに対し、揖保川水系では播磨の中で最も多く古墳の集中する水系でありながら、加古川水系のような典型的な古墳群がみられず、前Ⅱ期までの前方後円墳が集中していることは、いわゆる西播と東播の古代地方国家の内的発展に若干の差異があり、「播磨」の地方史に極めて示唆的なものがある。

各水系のうち中・下流域に古墳が集中的に分布しているが、最上流域に位置しているものに河口から約40kmの横坂古墳がある。河口および海岸線近くの古墳に五色塚古墳、奥塚古墳がある。

前半期古墳は河川から派生する支流によって形成された小平野、小盆地のような完結されたところに分布している場合が多い。そうした自然地形の中にくっつかの古墳でひとつのまとまり（古墳群）をなしている。そうした古墳群は播磨全域で10個以上の古墳群を想定することが可能である（第1図参照）。揖保川水系では4個の古墳群があり、市川水系では2個の古墳群、加古川水系で

は4個の古墳群、明石水系では1個の古墳群などが指摘できる。

これらの古墳群は前方後円墳をはじめ円墳、方墳等で形成されているが、古墳群の解釈は別稿<sup>3)</sup>で検討を加えているのでくりかえさないが、古墳群によって示される領域は弥生稲耕作を基軸として形成、発展してきた農業共同体と深い関係を示しているとみられる。そして各古墳群のあり方を大まかにみると、(1)前Ⅰ期～前Ⅱ期で断絶するもの、(2)前Ⅱから前Ⅳまで存続するもの、(3)前Ⅲ期から前Ⅳ期までのもの、(4)前Ⅳ期から後Ⅰ期までのものの四つのタイプに大別することができる。下記に示す古墳群のタイプは各水系の古墳群の動向を概括的

第2表 古墳群のタイプ

水系 \ タイプ	(1)前Ⅰ期～前Ⅱ期	(2)前Ⅱ期～前Ⅳ期	(3)前Ⅲ期～前Ⅳ期	(4)前Ⅳ期～後Ⅰ期
揖保川水系	養久山・三ツ塚河内	権現山・綾部山丁		
市川水系		御旅山	御国野	山田
加古川水系		西条	玉丘・加東日岡	東条
明石川水系		瓢塚		

に知ることができよう。揖保川水系は播磨の中では前半期古墳が比較的多いところであるが、(1)のタイプすなわち前Ⅱ期で断絶する古墳群が多くあることが特徴的である。それに対し市川水系、加古川水系は(2)、(3)のタイプがみられ、前Ⅱ期から後半期古墳にまで存続する古墳群があって、これら水系が播磨内での古墳文化の優位性を示しているし、文献にあらわれた「播磨国造」、「播磨鴨国造」を輩出するに値する地域であったことがうなづける。揖保川水系と市川水系および加古川水系の古墳のあり方が異なる傾向にあることは指摘できるようなのである。そうした点を前方後円墳と立地の関係でみても同様のことが指摘できる。

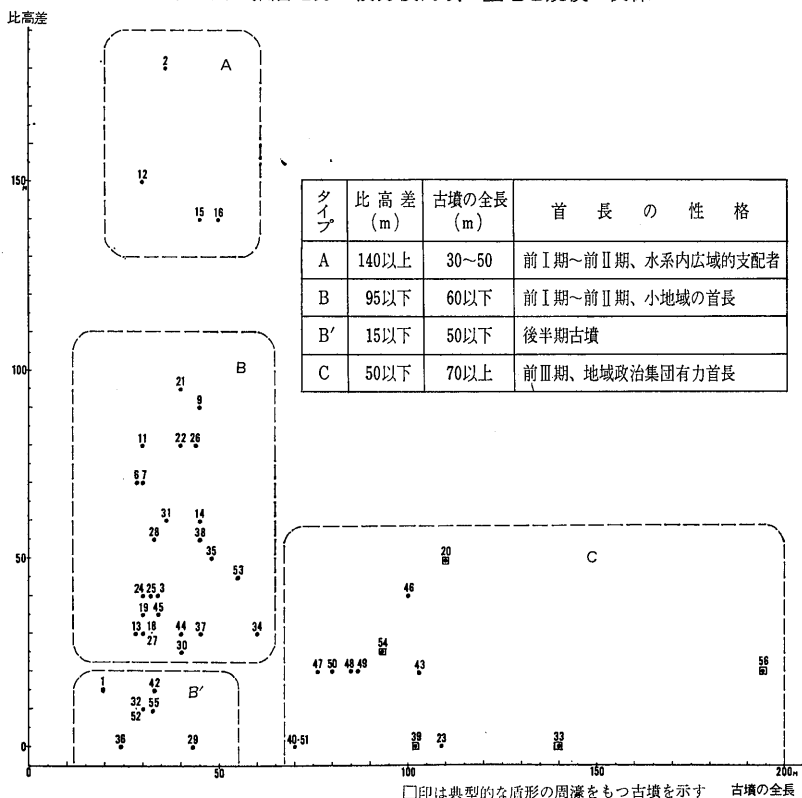
## 2. 立地

播磨地方での古墳の立地は平野・平地との比高差が95m以下のものが大半を占める。比高差140m以上の古墳は揖保川水系の4基に限られる。水系の

自然地形に関連があるのかも知れないが、揖保川水系の古墳は概して丘陵・山頂に立地しているものが多い傾向にある。古墳の立地について第3表を参照しながら整理してみよう。

まず古墳の立地が平地との比高差の大きいものに吉島古墳、宝記山古墳、権現山50, 51号墳の4基がある。これらは古式古墳であり、古墳を造営する場合の選地について考えるうえに重要な意味あいをもっている。古墳の選地は原則としてその首長の支配領域から見上げることができる高所に決定したとみられる。これら4基の古墳がいわゆる前Ⅰ期～前Ⅱ期の古墳であることを考えあわせ、比高差が大きく、古墳を平野から見上げるところに古墳の位置を定めるこ

第3表 播磨地方の前方後円墳の立地と規模の関係



とは首長と共同体成員との隔絶を意味するために必要なことであったとみられる。大方の傾向として比高差が 140m 以上のものに限らず比高差が 90m～50m に立地する古墳についても、周囲の地形からして平野から古墳が仰ぎ見られる位置に立地している古墳は前Ⅰ期～前Ⅱ期の古墳に多いことが指摘される。

それに対し平地に築造されている古墳すなわち比高差 50m 以下の古墳のうち、規模の大きいものは前Ⅲ期、小さいものは後半期古墳である傾向が指摘される。

前方後円墳の立地と古墳の規模を概括的に整理すると、(A)比高差 140m 以上で古墳の全長が 30m～50m のもの、(B)比高差 95m 以下で古墳の全長が 60m 以下のもの、(B')B のうち比高差 15m 以下で古墳の全長が 50m 以下のもの、(C)比高差 50m 以下で古墳の全長が 70m 以上のもの、等 4 個に分類することが可能である。古墳の立地、規模、それに現在までに知見できる副葬品の内容、また各地域内の他の古墳との関連を考慮に入れて考えると、(A)は前Ⅰ期～前Ⅱ期の古式古墳で、やや広域的な支配者の首長墓とみられる。(B)は前Ⅰ期～前Ⅱ期の小域的な首長、(B')は後半期古墳、(C)は前Ⅲ期で地域政治集団の有力首長とみれる。

### 3. 規 模

古墳の規模は前節で概括的にみたようにその立地と関連して考えることが大切である。まず、播磨地方の前方後円墳のうち全長 30m 前後のものが圧倒的に多数を占める。それに対し全長 90m 以上の古墳は 9 基で、播磨地方では「大古墳」と呼べるものである。それらは各水系において地域的政治集団の有力首長とみられるものである。

揖保川水系 …………… 輿塚、ひさご塚

市川水系 …………… 壇場山

加古川水系 …………… あたご山、玉丘、行者塚、宝塚

明石川水系 …………… 五色塚、王塚

古墳被葬者の歴史的な性格および古墳の卓越度を推しはかる尺度に、(1)前方後円

第4表 播磨地方の前方後円(方)墳概要一覧

水系	No.	古墳名	立地	比高差 (m)	墳形	周濠	墳丘規模		前方部 (m)	外部施設		内部主体 (m)				副葬品等	文献
							全長 (m)	後円部 径(m)		葺石	埴輪		長	巾	深		
川	1	横坂1	台地	15		×	19	10	7	×	×	横?					1
	2	吉島	山頂	180		×	36	15	6.5	×	×	縦	5.3	1.2		内行花文鏡1、三角縁四神四獣鏡2、尚方作獸帯鏡1、三角縁盤竜鏡1、土師、鉄刀、ガラス玉	2
	3	西宮山	丘陵	40		×	34	22	13	×	○	横	6.6			須恵器、土師器、鏡、冠帽、馬具、垂下式耳飾、武器、農工具	3
	4	養久山19	尾根	80		×					×						4、5
	5	◇12	◇	80		×					×					前方部(ツボ棺、土壙)	4、5、6
	6	◇5	◇	70		×	29	10×12	7?	○列石	×	壺棺				ツボ棺、配石墓2	4、5、6
	7	◇1	◇	70		×	30	18	5.8	○列石	×	縦	4.0	1.1	0.9	小形組合石棺2、大人用石棺3(人骨出土)1ー鉄槍、剣、鏡、2ー鉄棺、3ー鉄斧(棺外)ガラス玉8、鉄剣(絹布)	4、5、6
	8	南山協同牧場	丘陵	40		×					○						
	9	三ツ塚	山頂	90		×	45	27	26	○	×	縦	4.7	1.7		三神三獣鏡2、鉄剣、鉄刀、鉄斧、鉄鏃、土師(内墳……平鏡、三角縁四獣鏡)	7
	10	山下		15													
保	11	サンマイ山5	山頂	80		×	30	18			○	×	縦	3.0	0.7		
	12	宝記山8	山頂	150		×	30					○?	縦?				6
	13	釜剛山6	丘陵	30		×	28	18	17	○	×	縦?				古式土師器	6
	14	権現山18	丘陵	60		×	45	18	16	×	○	縦?				須恵器	8、9
	15	◇50	山頂	140		×	45	22		○列石		縦?					6、8、9
	16	◇51	丘陵	140		×	50	23×24	19.3	○	特製ハニワ	縦?					6、8、9
	17	小丸山	丘陵	30		×					○	横				2基	
	18	綾部山14	尾根	30		×	30	15×18			○	粘土棺					10
	19	◇29	尾根	35		×	30				○	粘土棺					10
	20	奥塚	丘陵	50		×	110	65	40	○	○	縦	6.0	1.0	1.0	(伝)三角縁神獸鏡、玉、剣	10、11
夢前川	21	舎利田山	山頂	95		×	40				○		縦				10
	22	城山	尾根	80		×	40				○列石						10
	23	ひざご塚	平地	0		?	109	54	36	○	○	縦					12
	24	山戸12	丘陵	40		×	30										
	25	◇4	丘陵	40		×	32	17				縦2	1.6 1.0	1.2 0.8	1.2 0.3	大形(高70cm、最大径65m)の土師ツボ棺、蓋	
	26	天神山	尾根	80		×	44	22	10	○列石		縦					
	27	ミノオ山6	丘陵	30		×	30			○							



水系	No.	古墳名	立地	比高差 (m)	墳形	周濠	墳丘規模		前方部 (m)	外部施設		内部主体 (m)				副葬品等	文献
							全長 (m)	後円部 径(m)		葺石	埴輪		長	巾	深		
市川	28	片山	山頂	55	☪	×	30				○	竪?				須恵器、土師器、鉄刀	
	29	多田	台地	0	☪	×	43	21	18.5			横	5.5				
	30	清盛塚	山頂	25	☪	×	40					竪					
	31	横山	尾根	60	☪	×	36					竪				附近にツボ棺多数	
	32	平野ハス池	尾根	10	☪	×	30										
	33	壇場山	台地	0	☪	○	140	92	82	○	○	長持型 石棺				刀剣、甲冑、鉄鏝、石棺3×1.4m	13
	34	兼田	山頂	30	☪	×	60	32	21	○	○	竪	2.0	0.6	1.0	鉄刀	14
	35	御旅山6	山頂	50	☪	×	48	30	12	○	○	竪?				土師器	15
	36	長塚	平地	0	☪	×	24				○	横				2基	
	37	女鹿山	山頂	30	☪		45			○	○					須恵器	
加古川	38	寺山	丘陵	55	☪		45				○					須恵器	
	39	玉丘	平地	0	☪	○	104	63	48	○	○	長持型 石棺				長持型組合式石棺 3.3×1.2×1.7m、玉類、剣	16
	40	小山	平地	0	☪	○	70	40									
	41	宝塚	台地	5	☪	○	90	44			○	竪?					
	42	妙見塚	台地	15	☪	○	35	19	15	○	○	横?				鏡、剣、須恵器?	17
	43	あたご塚	山頂	20	☪	?	103	75	51	○	○	竪?					18
	44	西山1	丘陵	30	☪		40	20		○	○					形象ハニワ	
	45	長慶寺山	山頂	35	☪		34	20	11	×	×	粘土塚?				内行花文鏡(長直子孫) 矛、鉄剣、鉄刀、鉄斧、鉄鏝	18、20
	46	行者塚	台地	40	☪	○	100	70	45	○	○					家形ハニワ	18、11
	47	日岡西大塚	台地	20	☪	○	76	35	18	○	○	粘土塚?					18
明石川	48	◇南大塚	台地	20	☪	○	85	45	33	○	○	竪				石製模造品?	18
	49	◇北大塚	丘陵	20	☪	○	86?	45	19	○	○	竪?				玉、土器?	18
	50	◇勅使塚	台地	20	☪	×	80	40		○	○	粘土塚?				三角縁神獸鏡(福岡・鏡子塚と同範)	18
	51	聖陵山	平地	0	☪	?	70	38								組合石棺、銅鏝13、鉄刀	18、19
	52	金棒池	池	10	☪		30			×	×	竪					
	53	白水ひきご塚	丘陵	45	☪	×	60	32	16	×	×						21、22
	54	王塚	台地	25	☪	○	93	42	36								
	55	大蔵山	丘陵	10	☪	×	32	20	11	×	×	横					
	56	五色塚	台地	20	☪	○	194	120	81	○	○	長持型 石棺?				長持型石棺、石製合子、子持勾玉	23、24

という墳形の採用はもちろんのこと、(2)その全長が大きく、(3)立派な盾形の周濠をもち、(4)定形化した主墳を中心に陪塚がつくられ、(5)内部主体に組み合せ長持形石棺を安置し、また、(6)副葬品の種類および数量が考えられよう。上記の尺度で照合すると9基の古墳のうち、副葬品の検討は資料的制約によってできないが、すくなくとも五色塚、玉丘、壇場山の3基は合致する。この3基の古墳こそが播磨地方で最も卓越した古墳と断定できよう。そこで大和政権の地方支配制度に国造制があることは周知のとおりで、その成立と展開について諸説があるが、すくなくとも6世紀末には国造制が施行されていたようである。したがって5世紀中頃の築造であるこの3基の古墳被葬者はのちの国造に比定されるような最有力首長とみられる。すでに先学によって莫然とではあるが、文献にあらわれた明石国造を五色塚古墳に、播磨鴨国造を玉丘古墳に、播磨国造を壇場山古墳にそれぞれ比定されていることはその古墳が前Ⅲ期であることから、のちの国造級の有力首長と考えることに妥当性がある。ちなみに但馬では全長128mの池田古墳が、丹波では全長143mの雲部車塚古墳が上記の諸条件に合致し、のち国造級の有力首長と想定できる。そうしたことは隣接する吉備においても同様のことが考えられ、中央の大和においても考えられるようである。

国造級に比定される有力首長は市川水系、加古川水系、明石川水系に存在するが、播磨地方のなかで早くから古式古墳が集中している揖保川水系にそのような古墳が存在しないことは、大和政権による「播磨」支配のあり方で「東播」と「西播」＝揖保川水系の差異があったと推測される。この点については後述する。

つぎに前方後円墳と大形円墳、方墳との関係についてふれておきたい。大和政権と地方国家の首長との関係のなかで前方後円墳の墳形のもつ歴史的意味を明確にする要があることはいうまでもないが、それぞれの古墳被葬者の財力は前方後円墳では後円部の径の規模で推測することができよう。また、円墳、方墳ではその径および一辺の規模が古墳被葬者の財力を示しているとみられる。前節でみたように(C)のタイプすなわち、たとえば全長70m級以上の前方後円

第5表 播磨地方の径35m以上の円墳・方墳一覧

水系	No.	古墳名	立地	墳形	周濠	径 (m)	葺石	埴輪	内部 主体	副葬品等	備考
			比高差 (m)								
千種川	1	蟻無山	山頂 40	帆立	×	40 (50)	○	○	豎?		
	2	上月	丘陵 15	円	×	35	○		豎	石棺	
揖保川	3	塚森	平地 0	円	○	44	×	×			周濠含め 70m
	4	大塚	丘陵 40	円	×	35	×	○	豎?		
	5	綾部山1	山頂 90	円	×	38	○	○	豎?		
市川	6	山ノ越	平地 0	方	○	55		○	石棺	鏡、玉、剣	
加古川	7	マンジウウ	平地 0	帆立	○	41 (46)		○			
	8	王塚(小野)	台地 20	円	○	66	○	○	豎	4.8×1.1×0.8(割竹形石棺) ●製六獣鏡、眉庇付冑、鉄留短甲、帯織短甲、肩甲、刀、刀子、鉄鏃、碧玉製三輪玉、(棺外) 植、鉾、刀	
	9	大塚(小野)	台地 20	円	○	47	○	○	粘土	鏡、刀剣、玉類	
	10	大塚(三木)	台地 20	方	×	35		○	石棺	鏡、冑、刀剣	
	11	人塚	台地 20	帆立	○	50 (67)		○	豎?		
明石川	12	幣塚	台地 10	円	○	40			豎	玉類、刀	
	13	小壺(五色塚)	台地 50	円	×	67	×	○			

( ) の数値は作出し部分を含めた長さを示す

墳であれば後円部径は 40m 前後以上はある。今、後円部径 40m 以上の古墳を  
摘出すると 12基で、同じく径 35m 以上の円(方)墳は 13基あってほぼ同数である。  
なお、ここにあげる径 35m 以上の円(方)墳は 前Ⅲ期～前Ⅳ期の古墳である。  
一方、前方後円の形をとる古墳被葬者が大和政権から<姓>を与えられた  
諸豪族の身分的権威の象徴としてはじめて己が墳墓をつくりうることが可能で  
あったとみるならば、<sup>5)</sup>今指摘する13基の円(方)墳は大和政権との政治的關係に  
よって前方後円形を採用することのできえなかった在地の有力首長とみられる。  
したがって、前節でみたような(C)タイプの14基の古墳に加えたこれら円(方)墳  
で各水系の地域的政治集団の発展過程を検討しなければならない。

全長 30m 前後の前方後円墳といえば後円部の径が 16～24m で決して大きな  
ものでなく、どこにでも見うけられるものである。並入る前方後円墳が存在す  
る畿内中枢地域の様相とは決定的に規模が異なるところであって、30m 前後の  
前方後円墳がむしろ「播磨」では一般的であることは畿内の隣接地域の地方小  
国家の実態を如実に示しているといえよう。

#### 4. 編 年

古墳の分布、立地、規模等については大略知りえることができるが、それぞ  
れの古墳の内部主体および副葬品については十分な資料が得られないし、不明  
確な点が多いが、現在までの知見で播磨地方の前半期古墳の編年をおこないたい。  
そのうち副葬品の内容が判明している古墳を指標とし、その概要を記して  
編年作業の参考としたい。<sup>6)</sup>

**前Ⅰ期** この期の古墳の特徴は、(1)立地は自然地形を利用し、平野をのぞむ  
高所にあること。(2)墳形と規模は前方後円(方)形で、前方部は低く、しかも平  
坦である。前方部は半ばより前端に向けて極端に開くものが多い。(3)ハニワが  
ないこと、(4)内部構造は竪穴式石室で比較的長い木棺を安置している。石室は  
主軸と直交する場合が多いが、自然地形を利用して築造することから必ずしも  
主軸に直交するものとはいきれない。(5)副葬品は鏡、玉類、武器、生産用具  
に統一されている。なかでも前Ⅰ期前半のものは舶載鏡ばかりであるが、後半

のものには一部仿製鏡が副葬されている場合があり、伴出遺物に鍬形石、車輪石、石釧、筒形銅器がある。播磨における前Ⅰ期の古墳として吉島古墳をその代表とすることができる。

#### 吉島古墳（揖保郡新宮町吉島）

揖保川右岸の山頂ちかくの尾根上（比高 180m）につくられた全長 36m、後円部径 15m、前方部巾 6.5m の前方後円墳である。比高 180m という高所に立地し、この古墳からは下流域の権現山古墳群を眺め、遠く瀬戸内海の家島群島まで望むことができる。ハニワ、葺石はなく、明治30年に後円部にある長さ 5.3m、巾 1.2m の割石積みの竪穴式石室より鏡 6 面、小玉、刀剣、土師器片などが発掘された。鏡は尚方作竜虎鏡 1 面、天王日月唐草文帯四神四獣鏡 2 面、吾作銘四神四獣鏡 1 面、波文帯竜虎鏡 1 面、長宣子孫内行花文鏡 1 面であって、すべて中国鏡である。これらの鏡には山城大塚山古墳、山城一本松塚古墳、大和佐味田宝塚古墳と同范関係をもつものがある。

**前Ⅱ期** 4 世紀後半の時期で、(1)立地は前Ⅰ期と同様、自然地形の利用が主であり、平地に古墳が築造されることはまずない。(2)墳形は前方後円墳、前方後方墳があり、播磨地方ではこの期に径 20m 程度の円墳が多く築かれていることが特徴的である。(3)内部構造は竪穴式石室でスレート状の石材で構築されているものもあるが、地の石でつくられた割石積みのものもある。また一部には粘土槨の内部主体もみられる。なお、ハニワの普及もさほど顕著でない。(4)副葬品は前Ⅰ期の鏡、玉、武器に対し、鍬形石、筒形銅器、鈎垂車などの石製品が新たに加わり、鏡も仿製鏡が増加してくる。

#### 三ツ塚古墳（龍野市揖西町龍子）

養久山墳墓群のある山の続きにある山頂（比高 90m）に立地する。全長 45m、後円部径 27m、前方部巾 26m の前方後円墳である。昭和 6 年に後円部にある長さ 4.7m、巾 1.7m の割石積みの竪穴式石室から三角縁半肉刻神獸鏡 1 面、波文帯三神三獣鏡 1 面、鉄剣 3 口、鉄刀断片一括、鉄斧 2 個、鉄鏃 2 本が発掘された。波文帯三神三獣鏡は二分県亀甲古墳、和歌山県岩橋古墳と同范関係をもち、鏡の研究からすれば吉島古墳よりやや時期の下るものである。なお、

この前方後円墳から約 15m 離れて径 23m の円墳がある。ここからはキ鳳鏡 1 面、小形三角縁神獸鏡 1 面が発見されている。

**前Ⅲ期** 5 世紀前半を中心とする時期で、(1)立地は 独立丘陵・台地もしくは丘陵突端部にあり、平地と比高差があまりないところに位置している。(2)墳形は前方後円墳が主で、その規模も大形化し全面葺石で周濠をもち定形化してくる。陪塚がつくられるのもこの時期で、円墳にも造り出しが付設されるようになってくる。(4)副葬品は鉄器の量が増え、馬具とくに衝角付および眉庇付青などが副葬されはじめる。鏡も三角縁神獸鏡だけでなく大・小形の仿製鏡、変形神獸鏡、珠文鏡、乳文鏡、獸文鏡の多岐にわたるようになる。

#### 奥塚古墳（揖保郡御津町黒崎）

揖保川の河口の瀬戸内海をみおろす比高 60m の独立丘陵上に立地する。全長 110m、後円部径 65m、前方部巾 40m で、墳丘全面葺石の揖保川水系最大の前方後円墳である。後円部に長さ約 6 m、巾 1 m、深さ 1.2m の割石積みの竪穴式石室があり、副葬品は三角縁神獸鏡、玉類が出土したと伝えられている。古墳の立地は県下最大の規模を有する五色塚古墳、それに赤穂市みかんのへた古墳等に類似し、大和政権の海上交通に関係があるものとしてよく知られている。なお、奥塚古墳の西の山塊には前方後方墳（綾部山 14、29号墳）方墳（綾部山 2、3、8号墳）大形円墳（綾部山 1号墳）など23基からなる綾部山古墳群がある。

#### 壇場山古墳（姫路市御国野町国分寺字林堂）

海拔 15m の微高地上に築かれた全長約 140m の前方後円墳で 巾約 12～18m の周濠がめぐっている。前方部巾 82m、後円部径 92m で、墳丘は三段の築成でくびれ部には約 10m の造り出しをもっており、後円部墳頂に長さ約 3 m、巾 1.4m の縄掛突起のある組み合せ式長持石棺が露出している。なお、外部施設として葺石、ハニワが確認されている。ハニワは家形、盾形、蓋形および短甲形、轂形が知られている。副葬品は明らかでないが明治43年に植樹した際、石棺の西下方より鉄鏃 200余、刀剣 10余が発見されたという。なお、この壇場山古墳の周囲に径 15～20m の陪塚があった。いずれにしても 壇場山古墳は定

形化した周濠，陪塚，さらに組み合わせ式長持石棺をもち，播磨地方第2位の規模を有する前方後円墳であることから5世紀中頃の市川水系を支配した国造級の墳墓と推測されるものである。

#### 玉丘古墳（加西市玉丘町）

青野ヶ原台地の西方に加古川の支流である万願寺川が南北に流れ，そして東南から西北に向けて下里川が走り，それに囲まれるようになだらかな丘陵がつづいている。玉丘古墳群は丘陵の一隅が小盆地状を呈しているところに大小10基の古墳で形成されている。主墳玉丘古墳は全長104m，後円部径63m，前方部巾48m，くびれ巾42m，周濠を含め長さ142mの前方後円墳である。墳丘は三段築成で最下段は割石で葺石をはりつめていて全面葺石の可能性はある。ハニワも検出されている。後円部中央に主軸に平行して組み合わせ式長持石棺が直接安置されていた。石棺は長さ3.3m，巾1.2m，深さ1.7mをはかる。明治17年に発掘され石棺内部から刀剣，勾玉，管玉等が出土したというほか副葬品については明らかでない。付近には陪塚1号（径25m，高さ5m），陪塚2号（径20m，高さ3m），クワンス塚（径35m，ハニワ），実盛塚（径21m），壇塔山（径35m），笹塚（径35m，周濠巾17m），マンジョウ（径42m，造り出し，周濠巾10m，ハニワ），北山（径18m，ハニワ）等の古墳があるが，他にいくつかの古墳が分布していたようである。消滅した小山古墳は水田の畦畔から推測して全長70m，後円部径40mで周濠をもつ前方後円墳であろう。おそらく主墳玉丘古墳の後に続く時期の古墳と考えられる。

また，玉丘古墳の北東方，笹倉に亀山古墳がある。古墳の立地は160mほどの山頂にあり，径30m，高さ2mの円墳である。小形のハニワが発見されている。内部主体は2主体あり，そのひとつは長さ4.4m，巾0.8m，深さ0.8mに角礫凝灰岩質の地山を掘ってつくられている土壌である。この土壌に0.6m<sup>2</sup>の板石を蓋しており，板石の合わせ目には粘土で目ばりがしてあった。副葬品は三角縁神獣鏡，短甲付小札類，眉庇付冑，工具の鋏，鉄剣6，鉄刀1，槍1，鉄鏃多数がある。とくに鏡は径14cmの半円方格有銘帯四神四獣鏡で「番昌吉利金石」と判読できる銘がある。もうひとつの土壌も地山を掘りくぼめ，長さ

3.8m、巾0.8m、深さ1m、蓋の状態も前の土壙と同様である。副葬品は短甲、鉄刀1、鉄剣3、鉄鏃があり、鏡は径6.1cmの小形の乳文鏡である。築造時期は前Ⅲ期とみられる。

#### 行者塚古墳（加古川市八幡町中西条）

加古川からの比高差40mの台地上に築かれた全長100m、前方部巾45m、後円部径70m、前方部高さ3.5m、後円部高さ9mの前方後円墳である。墳丘は三段に築かれ、西側くびれ部に造り出しがある。河原石の葺石があり比較的大形のハニワがありそのなかには形象ハニワもみられ、古墳の周濠は巾13mをはかる。内部主体は未発掘のため不明である。墳形やその規模等から前Ⅲ期のものとおもわれる。なお、付近には人塚古墳（全長67m、径50m）、尼塚古墳（全長37m、径30m）の帆立貝式古墳がある。両者は前Ⅲ期とみられるものである。

#### 五色塚古墳（神戸市垂水区五色山）

五色塚古墳は垂水丘陵南麓の台地突端を利用して前方部を明石海峡にむけて築かれており、瀬戸内海を眼下にみおろす景勝の地にある。墳丘規模は全長194m、後円部径120m、前方部巾81m、後円部高さ18m、前方部高さ11.5mであり、三段築成で巾約15～20mの周濠のある県下最大の前方後円墳である。また、「千壺」の名の如く全面葺石でハニワも2,200本余りたてられていたと推定されている。内部主体は不明であるが『播磨鑑』に石棺が露出していたという記事があることから、おそらく玉丘古墳、壇場山古墳と同様に石室をもたなくて、長持形石棺が安置されているものと推察される。副葬品についても明らかでない。かつて石棺が露出していたようであるし、墳丘整備工事の際、西側くびれ部から子持勾玉が発見されたことなどから、すでに一度石棺が開かれたとみられる。

なお、かつては五色塚古墳の周囲にいくつかの陪塚が存在したと伝えられているが、現在は西側に接して小壺古墳（径67m）がある。さらに西方400mのところに歌敷山東、西古墳があった。

**前Ⅳ期** この期は後半期古墳への転換期で5世紀後半とみる。(1)墳形は前方



後円(方)墳，円墳，方墳があり，前方後円墳は前Ⅲ期が巨大化の頂点であるが，この期ではむしろ縮小化の傾向をみせはじめる。播磨におけるこの期の墳形の特徴は前方部の縮小傾向，いわゆる帆立貝式古墳の出現である。また，円墳にしてもやや大きい目で立派な周濠をもつものが多く指摘できる。(2)内部構造としては，畿内など先進地域においては新式の葬法である横穴式石室の採用がはじまるが，播磨ではまだその採用がなされていないとみる。竪穴式石室，箱式石棺，もしくは木棺直葬を内部主体とするものが多い。(3)副葬品としては鏡とくに画文帯神獸鏡，素文鏡があり，この期の特徴は馬具の普及と須恵器の副葬がはじまる。

#### 宮山古墳（姫路市坂元字城山）

市川の東岸の南北につらなる御旅山，仁寿山，小富士山の山丘がある。その北寄りの一角の丘陵上（標高 35m）に立地する径 30m，高さ 4 m の円墳である。墳丘裾にハニワがめぐっている。内部主体は上下に位置をちがえる三つの竪穴式石室が構築され，それぞれの規模は 4.6m×1.8m，3.2m×1.2m，3.4 m×1.1m である。石室内には箱形の木棺が安置されていたとみられる。副葬品は舶載の魼竜鏡，画文帯神獸鏡，硬玉，碧玉，瑪瑙，琥珀，ガラス製の玉類，金製垂飾耳飾，金環，金銅製鈎帶，環頭太刀など大量の刀剣，矛，鉄鏃，挂甲，短甲，臑当，鐙等の馬具類，手斧，鎌等の農工具類，鉄鉞，砥石，土師器，古式の須恵器などの多種多様に及ぶ。とくに垂飾付耳飾，環頭太刀，鉄鉞，短甲等は朝鮮半島との関連がつよい遺物であって，この被葬者が大和政権の朝鮮出兵になんらかの役割をはたしたことを物語っているものといえよう。なお，この周辺には御旅山 6 号墳（全長 48m），兼田古墳（全長 60m），壇場山古墳（全長 140m）等の前方後円墳をはじめ山之越古墳，奥山大塚古墳，打越山古墳，明田長塚古墳などが分布し，これらは壇場山古墳を中心とする「播磨国造」級の首長系譜とみられる古墳である。

以上の指標とみられる諸古墳をとおして各水系の古墳の分布，立地，規模等の検討から編年を行なったものが第 6 表の編年表である。

第6表 播磨地方の前方後円（方）墳の編年

水系	古墳群	年代 編年	300	350	400	450	500	550	600	650
			前 I	前 II	前 III	前 IV	後 I	後 II	後 III	
千種川	吉島		吉島				横坂1			
	養久山	養久山5	養久山1	三ツ塚		山下	西宮山			
	三ツ塚	養久山19 養久山12				南山協同牧場				
	河内		金剛山6	サンマイ山5 宝記山8						
	権現山・綾部山		権現山51	権現山50 権現山18	興塚	綾部山14 綾部山29	小丸山			
市川	丁	山戸4 山戸12		舍利田山 城山	ひさご塚					
	横山		ミノオ山6	天神山						
	山田		横山			片山 清盛塚	多田			
	御旅山 (御国野)			御旅山6	壇場山	兼田	長塚			
加古川						平野ハス池				
	玉丘				玉丘	女鹿山 寺山				
	東条				宝塚	小山 マンジユウ	妙見塚			
	西条	西条52号墓 長慶山寺		あたご塚	行者塚	人塚 尼塚				
	日岡				西大塚 南大塚	勅使塚 北大塚				
明石川	瓢塚			白水ひさご塚	王塚 五色塚	大蔵山	金棒池			

## 5. 各水系の政治的發展

これまでみてきた分布、立地、規模等の若干の検討のなかから、各水系の主要な古墳をとおして概観してみたい。

(千種川水系) この水系には前半期古墳の前方後円墳はまだ発見されていない。そのことは播磨のなかで他の水系と異なり、この水系の流域面積が小さいことから生産基盤の低弱性に起因するのかも知れない。いずれにしてもこの水系の古墳文化の低調がめだつ。

前半期古墳としてあげられるものは、(1)瀬戸内をみおろす山頂に立地し、海上交通と関連があるとみられる径 30m のみかんのへた古墳（赤穂市）、(2)矢野川が千種川に合流するあたりの山頂に立地する径 40m、高さ 8 m、裾部に長さ約 10m の方形の造り出しをもつ蟻無山古墳（赤穂市）、(3)中流域の後背小盆地をひかえた丘陵上に立地する径 17m の円墳で、長さ 4.8m、巾 0.9m の粘土槨を内部主体とし、山城車塚古墳と同范関係のある三角縁四神四獣鏡、玉類、銅鏃、鉄鏃、ヤリカンナ、刀子、鎗、劍等の遺物群からして前Ⅱ期とみる西野山 3 号墳（上郡町）、(4)上流域では径 35m、高さ 5 m で内部主体は竪穴式石室とみられる上月古墳（上月町）、(5)同じく佐用盆地をみおろす丘陵上に立地する一辺 20m の方墳、径 15m 前後の円墳数基からなる円応寺古墳群（佐用町）等がある。

この水系におよそ 2 個の古墳群が存在する。そのひとつは西野山 3 号墳、蟻無山古墳を中心とする古墳群であり、他は上流域の円応寺古墳群である。現在のところ、この水系で最古とみられる古墳は西野山 3 号墳で前Ⅱ期とみられるが、この水系の古墳出現の時期的な遅れと相まって、前半期古墳時代の前方後円墳が皆無であることは、中央政権からの支配がそれほど強くなかったことを示しているとみられる。みかんのへた古墳は千種川水系の古墳として扱うより、むしろ揖保川水系の地域政治集団によって管轄されたとみられる相生湾——海上交通を管理した首長の姿をみる<sup>7)</sup>ことができるが、いずれにしても千種川水系、もしくはこの水系にちかい古墳として前Ⅲ期のこのみかんのへた古墳

をあげる程度である。

この水系には製鉄遺跡および産鉄に関する古文献が多くみられるが、前半期古墳の様相とは必ずしも合致しない。製鉄がこの水系で積極的に行われるようになるのはすくなくとも6世紀以降のことであつたらしい。

（揖保川水系） この水系は前半期古墳の多く集中するところであつて、播磨のなかで早くから発展したところであつたとみられる。吉島古墳（新宮町）、養久山1号墳（揖保川町）、舍利田山古墳（龍野市）、権現山51号墳（御津町）、金剛山6号墳（揖保川町）などは前Ⅰ期古墳と考えられ、それに続く前Ⅱ期古墳は三ツ塚古墳（龍野市）、松田山古墳（太子町）、権現山50号墳（御津町）、宝記山8号古墳（揖保川町）などがある。この水系にある前Ⅰ期から前Ⅱ期の古墳を自然地形および弥生後期の集落跡などのあり方からして、首長系譜のたどれる4個の古墳群（まとまり）に分けることができる。

首長系譜としてとらえられる古墳群（まとまり）が、前Ⅱ期でその系譜が断絶する現象はひろく播磨全域において指摘されるところであるが、とくに揖保川水系ではその傾向が顕著である。それは前Ⅱ期で終結する多くの古墳群は政治権力によってより広範に政治的統合がすすめられ、古墳を造営するだけの首長を輩出することができなくなったことを示している。この水系の政治的統合をすすめた首長は前Ⅲ期の奥塚古墳（御津町）を中心とする勢力であつたと想定される。

揖保川水系の前半期古墳時代の世界をかいつまんでみると、4世紀末ごろまでは4個の古墳群が相対的に自主性を保持できた面があつたとみられるが、5世紀に入ってから水系全体を統轄する強力な首長（奥塚古墳）が出現し、各古墳群にあらわれた地域政治集団が水系全体のなかに包含され揖保川地方小国家が形成されたとみられる。播磨のなかで比較的早くから古墳文化が展開された水系ではあるが、前Ⅲ期の5世紀中頃には、いくつかの水系・地方小国家を統括する広範な地方国家が形成されてくる。それは市川水系の壇場山古墳（のち国造級）を中心とする勢力によって、揖保川水系も連合・隷属関係が成立するようである。

(市川水系) この水系の前半期古墳で最古と考えられるものに、中流域の観音寺山(市川町)と下流域の御旅山3号墳、同6号墳、横山7号墳(以上姫路市)がある。観音寺山古墳は比高114mの尾根上に立地し、墳形は前方後円墳とみるむきもあるがはっきりしない。長さ3.5m、巾0.9mの竪穴式石室が開口しているが、その構築状況は揖保郡太子町松田山古墳、加古川市天坊山古墳に極めて類似しているため、前Ⅱ期の古墳とみるのが妥当である。御旅山3号墳は比高90mの山頂にある径約8mの円墳である。内部主体は4.3mの割竹形木棺とみられ、副葬品は舶載の三角縁三神三獣鏡1面、玉、剣、刀子、銅鏃、鉄鏃などがある。鏡は福岡忠隈古墳、愛知白山藪古墳、兵庫小見塚古墳と同範の波文帯神獣鏡である。

つぎに前Ⅲ期の古墳は下流域に集中している。それは壇場山古墳、山ノ越古墳、人見塚古墳(以上姫路市)である。壇場山古墳については前述しておりであるが、山ノ越古墳は壇場山古墳の北西に近接する一辺55mの方墳で、小壺古墳(一辺67m)(神戸市)について県下第2位の規模を有するものである。墳頂には長さ2.5m、巾1.2mの縄掛突起のあるくりぬき石棺が露出している。この山ノ越古墳は壇場山古墳より時期が先行すると考えるむきも一部にあるが、両古墳の副葬品からの具体的検討はできないが、壇場山古墳出土の石棺よりやや小形で、蓋の短辺の縄掛突起を欠いている点から、山ノ越古墳の方がやや時期が下るものとおもわれる。つぎに前Ⅳ期の古墳は前述している宮山古墳(姫路市)がある。

市川水系の前半期古墳の世界については、中流域の市川町あたりに観音寺山墳を中心とする首長系譜とみられる古墳群が存在するようであるが、資料的制約によって、いまひとつ明確にしがたい。また、姫路市北部および香寺町付近の清盛塚古墳(姫路市)、片山古墳、柏尾古墳(以上香寺町)を中心とする前半期古墳から後半期古墳にかけての古墳群が存在する。下流域においては、のち播磨国造の墓と想定される壇場山古墳を中心とする一大古墳群が存在する。

「播磨風土記」神前郡の条に、佐伯直の祖阿我乃古が天皇に「多駝」の地を請うたことを記していることなどは佐伯直の本貫地が市川中流域から下流域で

あったと想定される。その佐伯直が「播磨国造」でもあったことは、その被葬者を壇場山古墳群に比定することができる。佐伯氏は大和政権を背景にして、5世紀初めまでに揖保川水系の伊和族などをおさえ国造の地位をえたと考えられる。

(加古川水系) この水系は広大な流域面積をもつことから古墳群の数も多い。かつて、加古川水系の古墳を三つの地域的政治集団としてとらえたことがある。すなわち、(1)加古川南部政治集団、(2)加西政治集団、(3)加東政治集団である。<sup>1)</sup>

加古川南部地域政治集団には日岡古墳群、西条古墳群、長慶寺山古墳群（以上加古川市）、あたご山古墳群（三木市）、それに天坊山古墳、聖陵山古墳（以上加古川市）、経塚山古墳、天神山古墳（以上高砂市）などが主要な古墳である。

これらの古墳はさらに小さな2～3基から5～6基の古墳のまとまりとしてとらえることができる。たとえば、加古川左岸に加古川とは別に天川が流れる小平野に経塚山古墳・天神山古墳、加古川上荘地区には長慶寺山古墳・天坊山古墳、美囊川が加古川に合流するあたりにはあたご山古墳とそれに続く赤塚古墳・大塚古墳、加古川市神野地区には西条古墳群、さらに加古川市大野地区には日岡古墳群等々がある。それらはいずれも適好の耕地を付近に含み、前半期において一定期間、その地区を本貫とする首長の系譜的な古墳が存在する地域でもある。おのおの、系譜的につらなる古墳はすべて一様にその出発を同じくするのではなく多少の時期的なズレをもってあらわれている。そしてまた、おのおの古墳のまとまり間における数・規模のちがいもおこっている。つまり、長慶寺山古墳——あたご山古墳——行者塚古墳——人塚古墳・尼塚古墳の系譜が主流派首長によるものであって、天神山古墳——経塚古墳などは傍系首長古墳と想定される。地域内の首長間連合状況および大和政権との結びつきの強弱によって起こりうる、主流派と傍系派に分たれる状況がすくなくとも前Ⅱ期には明確になってくる。

つぎに加東地域政治集団で最も古い古墳は青野ヶ原の三ツ塚古墳（小野市）か、宝塚古墳（社町）で前Ⅲ期末のものであろう。したがって、加古川水系の三つの地域政治集団のうちで比較的その形成が遅れた地域である。しかし前Ⅳ

期になれば加古川南部、加西のそれらと比較しても決してみおとりすることがないまでに発展する。径 60m の大形円墳で、長さ 4.8m、巾 1 m、高さ 0.8m の竪穴式石室で、副葬品に仿製六獣鏡 1 面、眉庇付冑、革綴短甲と鉾留短甲、鉄刀、刀子、鉄鏃、槍、矛、碧玉製三輪玉などをもつ王塚古墳、かつて王塚の北にあり径 40m、高さ 11m、長さ 4 m、巾 1 m の竪穴式石室に刀剣、玉類と半円方形帯神獣鏡・方格規矩鏡・捩文鏡・珠文鏡など 7 面を出土した大塚古墳（以上小野市）がある。

ついで加西地域政治集団であるが、玉丘古墳群を中心に形成している。この古墳群の概要については前述しているので省略する。盟主玉丘古墳に先行する古墳については資料的制約により明らかにしえないが、亀山古墳は玉丘古墳に前後する時期と考えられる。前半期古墳の首長系譜としては、玉丘古墳——小山古墳——マンジュウ古墳と想定されよう。また玉丘古墳群は文献でいう播磨鴨国造の本拠地としてふさわしいものである。

最後に加古川南部地域政治集団のなかの日岡古墳群についてふれておきたい。日岡古墳群は円墳、前方後円墳の 8 基で構成している。この水系中、ひとつの古墳群のなかで前方後円墳（西大塚、南大塚、勅使塚、北大塚）が多く集中するものとして著名である。古墳の立地、規模、外部施設等についてはある程度知りえるが内部主体、副葬品については明らかにしがたい。副葬品については東車塚古墳（径 28m）出土の鏡 3 面と石釧 2 個、勅使塚古墳出土といわれる仿製の三角縁三神三獣鏡だけが知られる。東車塚古墳出土の鏡のうち仿製唐草文帯二神二獣鏡はヘボソ塚古墳（神戸市）出土のものと同範である。また勅使塚古墳出土の鏡は銚子塚古墳（福岡県）と同範である。副葬品のはっきりしない他の前方後円墳にしても、立地、墳形、規模から前Ⅱ期古墳とは考えられない。したがって、この古墳群は前Ⅲ期に集中して築造されたものと想定される。

加古川南部地域政治集団の首長系譜で前Ⅲ期の行者塚古墳から以降、西条古墳群ではいわゆる帆立貝式の人塚古墳（全長 67m、径 50m）、尼塚古墳（全長 37m、径 30m）続くが、そこには中央政権から政治的規制をうけた在地性のある西条古墳群<sup>B)</sup>の被葬者の姿を想像することができる。それと表裏して日岡古墳

群が形成されたと考えられ、日岡古墳群の被葬者は在地性のうすい中央から派遣されてきた首長と推測させる。ここでは西条古墳群と日岡古墳群のそれぞれの被葬者たちのちがいを指摘したい。

（明石川水系） 明石川を中心としてそれから派生する河川の流域面積は播磨の他の河川のそれと比較してみても一番小規模である。瓢塚古墳は立地・墳形からみて前Ⅱ期とみられる。かつては瓢塚の東に接して前方後円墳があって夫婦塚と呼んでいたが、いまは瓢塚（妻塚）が残っている。この瓢塚古墳に続くものとして、全長 93m、盾形の周濠をめぐるし、3 基の陪塚をもつ王塚古墳であろう。また、明石国造の墓とみられる県下最大の規模を有する五色塚古墳があり、いずれも 前Ⅲ期の古墳である。前Ⅳ期と考えられる 明石市幣塚古墳は径 40m、高さ 5 m の立派な円墳である。

## 6. まとめ——播磨の古墳文化の特質

前方後円墳の分布、立地、規模等から播磨地方の古墳時代を素描したが、播磨地方のなかでも東播と西播のちがいは、加古川水系と揖保川水系の古墳現象の比較において指摘できそうである。すでに莫然とではあるが、揖保川水系の古墳文化に、中央的なものと吉備的なものとの二つが存在し、その背景に大和政権と吉備政権が関連しあっていると考えたことがある。その視角は今でも正しい側面をもっているとおもっている。

播磨地方の古墳文化のなかで特徴的なものとして下記のことがあげられる。

- (1) 播磨地方の前方後円墳のうち全長 30 ～ 40m が多く、中央の前方後円墳の規模と対照的である。古墳時代の播磨地方の生産力の水準を示している、
- (2) 揖保川水系の前半期古墳はその多くが前Ⅱ期で断絶すること、
- (3) そうした中であっても、揖保川水系の吉島古墳の位置と副葬品(同範鏡)と権現山・綾部山古墳群の形成と発展があり、その時期に大和政権の地方支配が貫徹されてくること、
- (4) 播磨のなかで多数の前方後円墳があるわりに、西播地域では前Ⅲ期の典型的な盾形周濠をもつ全長 100m を超す大規模な前方後円墳が存在しないこと、



(5) 加古川水系を中心とするいわゆる東播地域は大和色が濃厚であるが、西条古墳群と日岡古墳群の比較で前Ⅱ期末～前Ⅲ期初には大和政権による統一支配が強化されてくること、

(2)～(4)については、西播地域の前半期古墳時代において在地性の強いことを示している。(5)については、東播地域が4世紀末には在地性を早くから抹殺して支配強化がすすめられたとみられる。すなわち大和政権の地方進展の過程で、それぞれの地域の首長層の把握のされ方、支配のあり方の相違による結果だと考えられる。風土記に現われる悲運の氏族ともいうべき「伊和族」の敗退の歴史は西播地域の前半期古墳文化の上に体现されているようにおもえる。

次回には、副葬品の検討、播磨と隣接する吉備、因幡地方の古墳文化との比較、文献との照合を予定しているが、西播地域の古代史像を次のようにみている。

弥生後期の土器の検討から、夢前川水系あたりで一線を画する地域差が指摘できるようである。揖保川と市川の文化的な差異がみられ、その傾向は4世紀に入ってもその差異が揖保川水系の前半期古墳にあらわれているとみられる。すくなくとも4世紀末までは揖保川小国家の独自性があったとみられる。文献にあらわれた天日槍と葦原志許乎命の国占めをめぐる闘争、伊和大神の敗退する説話、5世紀に入ってから渡来人による西播地域の開発に関する記事等は、揖保川水系の多くの古墳が前Ⅱ期で断絶し、つづいて前Ⅲ期に市川下流域に巨大な壇場山古墳が築造されることと合せて、この地域で土着の豪族として勢力をもっていた伊和大神を奉ずる伊和氏が大和政権の勢力によって圧倒されていく様子を想像することができる。すくなくとも4世紀末から5世紀初には伊和氏にかわって、この播磨で勢力をもってくるのが佐伯直で、のち播磨国造に任命されるまでに成長してくるのである。また、揖保川水系の中心地とみられる揖保里に粒坐天照神社が祀られることは、まさに反大和的色彩の強い揖保川水系に中央政権の進出ぶりをよく示しているものと理解できよう。(つづく)

## 参 考 文 献

1. 村上紘揚・葛野豊,「横坂1号墳及び梅林古墳調査略報」『兵庫県佐用郡古代史研究の一』, 1965.
2. 梅原末治,「揖保郡香島村吉島古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第2輯 大正14.
3. 武藤 誠,「西宮山古墳発掘調査概報」『論集』関西学院短期大学終刊号, 昭和41.
4. 是川 長・松本正信・加藤史郎,『養久山』—播磨・揖保川水系における弥生墳墓— 1967.
5. 近藤義郎,「兵庫県揖保郡養久山墳墓群」『日本考古学年報』20, 昭和47.
6. 是川 長,「揖保川水系の前半期古墳について」『論集』神戸女学院大学第23巻3号, 1977.
7. 梅原末治,「龍子の三ツ塚古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9輯, 昭和8.
8. 加藤史郎,『原始古代の揖保川流域』, 1966.
9. 中村信義 他,『御津町岩見地区遺跡分布調査報告書』, 1975.
10. 是川 長,『綾部山古墳群調査報告書』, 昭和46.
11. 榎本誠一,「兵庫県下における前方後円墳」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集, 1974.
12. 上田哲也,『姫路丁古墳群』, 昭和41.
13. 小西孝四郎,「壇場山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯, 大正12.
14. 松本正信・加藤史郎・松下 勝,「播磨地方の考古学的踏査(その1)」『古代学研究』第44号, 1966.
15. 松本正信・加藤史郎・石橋正樹,『御旅山3号墳調査報告』, 1971.
16. 梅原末治,「玉丘古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9輯, 昭和7.
17. 黒田淑正,「埋蔵文化財」『小野市誌』, 昭和44.
18. 是川 長,「考古学上からみた三木地方(加古川流域を中心として)の古代」『三木市史』, 昭和45.
19. 渡辺九一郎・直良信夫,「聖陵山古墳とその遺物」『考古学雑誌』, 第17巻 第8号, 昭和2.
20. 武庫川女子大学考古学研究会,「長慶寺山古墳群測量報告」『武庫川女子大学紀要人文科学編』第18集, 1970.
21. 直良信夫,「埴輪円筒の合口棺」『考古学』1—4, 昭和5.
22. 榎本誠一,「妻塚古墳外形測量報告」『中村古墳群発掘調査報告』昭和44.
23. 喜谷美宣『五色塚環境整備事業中間報告』I, 1970.
24. 小西孝四郎,「五色塚(千壺)古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯 大正12.

## 注

1. 是川長「考古学上からみた三木地方（加古川流域を中心として）の古代」『三木市史』、昭和45.
2. 門脇禎二『出雲の古代史』、1976.
3. 是川長「揖保川水系の前半期古墳について」『論集』神戸女学院大学第23巻3号、1977.
4. 鎌谷木三次『播磨出土漢式鏡の研究』、昭和48. 西谷真治「古墳と豪族」『兵庫県史』第1巻、昭和49. 榎本誠一「兵庫県下における前方後円墳」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集、1974. その他、播磨における古墳調査の報告書が多くある.
5. 西嶋定生「古墳と大和政権」『岡山史学』10, 昭和36.
6. 播磨地方の古墳の編年作業にあたっては、全国的な傾向も参考にしながら検討した。大塚初重「古墳の変遷」『日本の考古学』IV, 昭和41.
7. 揖保川下流域の右岸で、深く入りこむ相生湾をのぞむ扇状地に傍系ではあるが、ひとつの首長系譜をたどることのできる古墳群がある。すなわち、前Ⅲ期の犬塚古墳（径35 m）、前Ⅳ期の塚森古墳（径44 m）、後半期古墳の孤塚古墳、巨石墳の那波野古墳へと続く。相生地域は水田が極度にすくなく、農業生産より相生（那波）港を拠点とする漁業生産を掌握した首長を想定することができるところである。また、塚森古墳が径44 mで周濠もふくめて71 mにもおよぶ大形円墳であることは、全長100 mにちかい前方後円墳に匹敵するものであり、そこに有力な被葬者を想像できる。このような古墳群を母体とする集団から、みかんのへた古墳の被葬者が輩出されたと考えられる面もある.
8. この古墳群は弥生終末期の集団墓地の中に、一般の墓とは異なる様相の西条52号墓をはじめ全長100 mの行者塚古墳、径50 mと30 mの大形帆立貝式古墳人塚、尼塚古墳等の前半期古墳がある。さらに方墳、円墳で内部主体を木棺直葬や横穴式石室の多数の後半期古墳がある。したがって、この古墳群は弥生終末期から古墳時代前半期および後半期の全時期をとおして存続している。この古墳群の近くには東沢、猫池、野村、下村の諸遺跡にみる弥生後期から古墳時代前半にかけての諸集落跡の存在が推測され、これらはひとつの共同体を形成していたとみられる。西条古墳群を形成した中心的母体はこのような遺跡群であったとみられる。古墳発生の前段階には望塚出土の銅鐸にみられるように、この集団は銅鐸祭祀を行っていたようであり、弥生時代より継続する在地性のある古墳群とみられる.

追記、図版の製図には、中島豊一君の協力を得た、記して感謝したい。

1977. 11. 20. 稿

（本学非常勤講師、兵庫県立加古川東高等学校勤務）

## Summary

# The Burial Mounds of Zenpo-Koen in the Harima Region (Part 1)

Hisashi Korekawa

In the Harima region, there are 56 burial mounds named Zenpo-Koen (Square-front domed-rear).

In studying the ancient history of the Harima region, We can divide it into two parts according to the distribution, the location and the scale of ancient tombs. That is to say, ancient tombs of Seiban region (Western Harima) show that this region was against the Yamato Government, while those of Tōban region (Eastern Harima) show that it was dominated by that government.

### Contents

#### Preface

1. Distribution.
2. Location.
3. Scale.
4. Transitions of burial mounds of Zenpo-Koen style.
5. Political development of each river basin.
6. Conclusion — Cultural traits of burial mounds of the Harima region.